

## (74) 栃木県玉生の石尊山鉾山

参考文献(1)を手引きに、「塩原地区」の廢鉾山の探査を行っている。本鉾山もそのうちのひとつであった。文献(1)の添付図中には、標高480mの石尊山の南東部の沢らしいところに、「石尊山鉾山」名と、鉾山記号があり、説明文中にも「・・・石尊山の南東麓に位する。・・・」との記述もあったので、容易に現地を確認できるものと考え、現地に探査に出かけた。が、数度の探査にもかかわらず、明確な鉾山跡を確認することができず、そのままとなっていた。説明文からすると本鉾山は極めて小規模な鉾山であつたらしい。月日の経過と共に現地は自然に復帰してしまったのかもしれない。

最近に至り、この鉾山が頭に蘇ってきた。著者の居住地である小山から結構近いところにあるので、現地に行くにはそれほど時間を要しないからである。文献(1)の情報は「不正確」なのではないか、より広範囲に探査範囲を広げれば、鉾山跡が見つかるかもしれないと考え直した。栃木地学愛好会の岩友に、この件について話をしたら、興味を持っていただいた。ネットで検索すると、石尊山頂への登山道途中に、立派な坑口跡があることがわかった。しかし、その位置は、石尊山の南東部ではなく、北東部である。全く方向違いである。

岩友と共に、南東部の再探査及び、北東部の坑口の探査を行うことにした。結果、石尊山頂から東北東方向に、幾つかの坑口が集中している箇所を確認した。坑口の個数、それらの接近配置、等から、これが「石尊山鉾山」跡と判断した。坑口の下部には、それなりのズリがあり、じっくり観察・採集すれば、金銀鉾、黄銅鉾などを採集できると思われる。

図1に、宇都宮の北部に位置している石尊山近傍の地図を示している。図2には、部分拡大した地形図に、GPSで測地した探査経路を青色曲線で示している。

現地への経路は次の通りである。現地の石尊山は、宇都宮の北に位置している。宇都宮方面からは、63号を北上し、金枝地区で、左折し、西進している村道に入っていく。道なりに直進していくと、直に林道に入る。図2に示している経路に沿って、林道を進めば良いが、適当な地点で車を留め置けよう。

なを、本鉾山の産出物は、参考文献(1)によれば、含金石英、硫化物(黄銅鉾、黄鉄鉾、方鉛鉾)。

2016年4月再探査

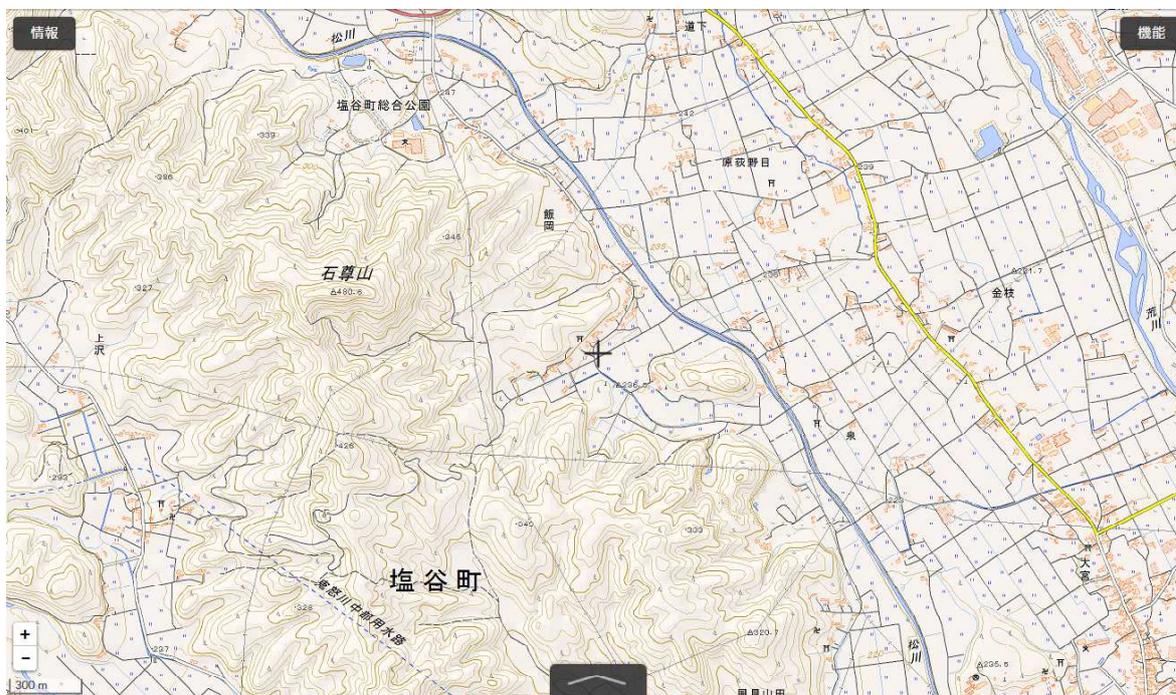


図1 国土地理院の地図サービスより複写掲載。宇都宮の北に位置している。鬼怒川の北側である。塩谷町総合公園、学校付近から、石尊山頂への登山ルートがあるらしい。が、著者は未確認。

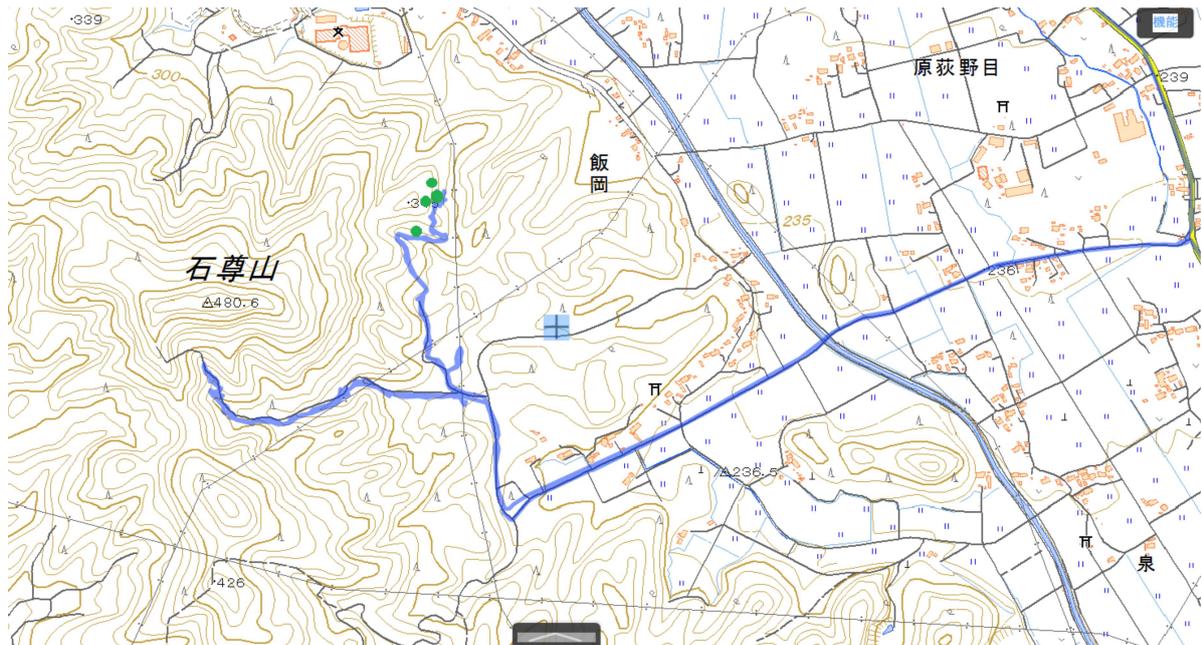


図2 図1の部分拡大。探査経路を青色で描いている。黄緑丸が、林道脇、山側にあった、確認した坑口跡。4個程か。近くにはズリもある。石尊山の南及び南東部を、林道沿いに探査を繰り返したが、明瞭な鉱山跡は確認できなかった。多数の坑口跡は、石尊山の東北東部にあった。現地には、送電線に沿って北に延びている林道を進んでいけば良い。

少し前に、最新のGPS器を入手した。GARMIN社製の「OREGON 650」である。この器は、アメリカのGPS、ロシアのグローナス、日本のみちびきを受信することができ、かつ、カメラも付いている。多様な機能が付いているが、未だ未だ使いこなせていない。国土地理院の日本全土の地形図のソフトが付いて、価格は8万円する。結構高いか。が、胸ポケットに入れたままでも、木々の生い茂る山中、深い谷間でも、正確に電波を受信し続けている。図2の青色の経路が、得られたデータである。OREGONで実測したデータを、国土地理院で地図サービスとしてインターネットで提供している地形図に、貼り付けたものである。

余談になるが、OREGONを入手する前は、旧式となっているが、自作のGPSを用いていた。旧式故に、受信感度が思わしくなく、上空が開けたところでないと、全うに測地をしてくれないので、直ぐに使用を諦めた。代わりに、登山者向けの腕時計式の高度計（入手価格は3万円前後と記憶している）を用いていた。今まで、本探査記で紹介している各鉱山の探査経路は、この高度計を頼りとして測地したものである。地形図に顕著な特徴（例えば、沢、川、尾根、等）があれば、この高度計でも比較的正確に、測地ができていたが、似た様な地形、平坦地形などでは、測地の不正確さは免れない場合があった。GARMINのすごさは、図2で一目瞭然であろう。

## 鉱山跡写真



写真1 63号から、西進している村道に入っていく。前方に見える山が石尊山。高圧鉄塔群も見える。現地はほぼ送電線の真下に位置している。



写真2 林道の山側にあった坑口の1つ。



写真3 同じく、林道の山側にあった坑口の1つ。



写真4 同上

## 鉱物写真

特になし

## 参考文献

(1)「塩原図幅地質説明書」岩生、今川、地質調査所、1955年(昭和30年)。